

昭和三十五年四月二十一日 五月二十三日
〔講演要旨〕

「仏教講話」

塾ではこの四月から仏教講演会をはじめた。四月二十一日江部鴨村先生をお迎えして、第一回を開いた。先生は篤信な仏教学者で、長い間教典を研究せられ、いろいろな書物もお書きになつている。前川理事長とは極めて昵懇で、現に塾の理事もしておられる。

お話は至つて面白く、あの難解無味な仏典を、いとも判り易く、時にユーモラスな実例を加えながら説かれたのであった。

欽明天皇以来千五百年の長い間、日本仏教として国民から親しまれて来たのであるが、現在では、知識人から殆んど忘れられていくようである。例えば、俗にいわれる「四苦八苦」の意味や出処などは、平安朝時代の文化人には、常識として知られていた事である、それが現代では、物識りを以て自他共に許す「話の泉」の常連先生にさえ、答えられないで、終に終りの鐘がなつたのである。

即ち四苦とは「生老病死」であり、八苦とはこれに愛別離苦、怨憎会苦、不求得苦、五蘊盛苦を加えたもので、勿論釈尊によつて唱えはじ

められた言葉であることを、私達もはじめて知つたのである。

用語がかく一般化して、その起原さえも忘れていた大衆にとつて、仏教は必ずしも歓迎されている訳ではない。これは迷いを増すことを喜ぶ世間にむかつて、迷いを捨てよと説くからか。それとも仏教に関係している僧侶や教団が、自分達の生活に追われて、葬式や法事やお墓の世話に専念しているからか。

更に社会が彼等に、それ以上のものを望まなかつたためか。何れにしても仏教渡来の当時は仏像教典と共に、その信仰の功德が宣べられたのである。「苦を脱して楽が与えられる」とか、「迷いを転じて悟りを開く」とかいったような大功德、これこそ仏教本来の目的であつて、矛盾に満ちた人生生活の唯一の救いであるとし、次回に更にその点、詳しくお話を頂くことにした。

五月二十三日、第二回を開催、仏教の根本構造であるその中心の世界観を聴く。

武蔵野女子大学教授 江部鴨村先生

如何に生くべきか、と共に如何に見るべきかの両方面からの思想こそは、客観的な妥当性と共に、その普遍性をも備えた真理であるとして、阿含経の世界観「四諦、即ち苦、業、滅、道」を詳細なる解説を加えて、説かれた。

最後に涅槃経の施身聞偈を話され、雪山童子が諸行無常、是生滅法の後の偈を得るために一身を投げ出して、道を求める真剣な態度を述べられ、終に生滅滅己、寂滅為楽の偈を得て、やがて衆生済度の使命を帯びるに至ると聞かされたのである。

(塾常務理事・望月記)

※当DVD収録のご講演録には、現在では不適切と思われる表現が用いられている場合がございますが、講演時の時代背景等を尊重し、当時のままといたしました。